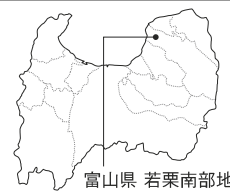


富山県
若栗南部地区わかぐりなんぶ

有限会社林農産

事業実施を契機に園芸作物を導入し複合経営を推進
担い手法人は経営面積100ha超のメガファームに

位置図



富山県 若栗南部地区

水稻に代わる作物の導入を目指し
用排水路整備を実施して排水不良を改善

余剰労働力を活用し特産品目を導入
法人の年商は1.5億円を達成

富山県北東部に位置する黒部市は、一級河川黒部川が東西を流れ、流域には扇状地が広がっています。そのほぼ中央にある若栗南部地区では、豊かな水を活用して古くから水稻栽培が行われてきました。さらに、昭和40年代から60年代にかけて県営農地整備事業を実施し、ほ場を30a区画に整備したことで、県内有数の水田農業地帯として栄えてきました。

しかし、事業実施から約50年が経過した近年では、用排水路の老朽化による漏水と道幅の狭い農道が障害となり、水管理に掛かる労力は増大し、大型機械の導入も進みませんでした。また、用水付近の漏水による排水不良なほ場では、水稻に代わる園芸作物の導入も困難でした。

これらの課題を解決すべく、若栗南部地区では平成23年度から29年度にかけて県営農地整備事業（経営体育成型）を実施しました。用排水路の改修と排水路の暗渠化による農道の拡幅を行ったことで、大型機械の導入が可能となり、水管理も省力化されました。

本地区を代表する担い手の有限会社林農産では、事業の実施を契機に水稻に特化した営農体制では、昨今の米価下落や消費低迷による経営不安が解消されないと考え、園芸作物の導入による複合経営に力を入れてきました。また、従業員の周年雇用を実現するには、経営の柱となる園芸作物の導入や農作物のブランド化、米の販路拡大が不可欠でした。

そこで、事業実施による営農の省力化によって生まれた余剰労働力を活用し、市の特産品目である白ねぎ、里いも、丸いもなどの栽培を開始したほか、さらに、キャベツ、はくさい、ブロッコリーなども導入し、栽培品目を増やしています。

令和元年には、的確な労働衛生管理と環境保全を意識した経営管理を証明する「ASIA GAP認証」を黒部市で初めて取得。これにより、消費者が安心して選択・購入できる農産物であることを対外的に示せるようになりました。

また、販路拡大にも取り組み、生産した米や野菜はJAの直売所や道の駅、スーパーの生産者特設コーナー

若栗南部地区



▲直売所で販売する「米」、「かくもち」



▲有限会社林農産の従業員



▲ねぎの収穫作業



▲「丸いも」を使用した和菓子
(上用饅頭)



育苗ハウスを活用した「ぶどう」栽培▲▶



農福連携や耕畜連携による 雇用創出や環境負荷低減にも貢献

これらの取組によって法人の経営力が向上し、令和6年度には、経営面積は法人設立時（平成17年）の3・4倍に拡大し、100haを超え、市内初のメガファームに成長しました。年商は令和5年末の時点で1億5800万円を達成し、設立時は4名だった従業員も、現在は常時雇用5名を含む13名に増えています。

白ねぎの生産が拡大し、出荷作業を担う労働力が不足したことから、令和2年度から農福連携にも取り組んでいます。市内の社会福祉法人と協議を重ね、障がい者に白ねぎの選別や箱詰め、水稻育苗箱の洗浄などを依頼しています。障がい者の活躍できる場を創出するとともに、従業員の負担を軽減しながら作付面積と出荷量の増大につなげています。

また、耕畜連携の取組も開始しており、法人が生産した飼料用とうもろこしや米のみ殻を近隣の畜産農家に提供する代わりに、堆肥（豚糞、牛糞）を無償提供してもらっています。これにより、地域資源の有効活用と化学肥料の使用低減が期待されます。

さらに、人材育成にも力を入れ、県の農業研修機関

「とやま農業未来カレッジ」の研修生受け入れや農業高校の課外学習、地元小学校における「学校田」の設置運営や中学校の職場体験学習にも協力し、農業を身近に感じられる環境づくりと次世代の人材確保につなげています。

今後とも、若栗南部地区では農業者と地域の理解・連携・協働を通じて、持続可能な地域の発展を目指します。



▲学校田での授業風景

事業概要

事業主体	富山県
事業名	県営農地整備事業（経営体育成型） 若栗南部地区
工期	平成23年度～平成29年度
受益面積	127.1ha 〔水田 127.1ha（うち汎用化 127.1ha）〕
受益戸数	206戸
標準区画規模	30a
1ha以上の区画合計面積	—
主要工事	用排水路工、農道工
関係土地改良区	黒部川左岸土地改良区
関係市町村	黒部市